

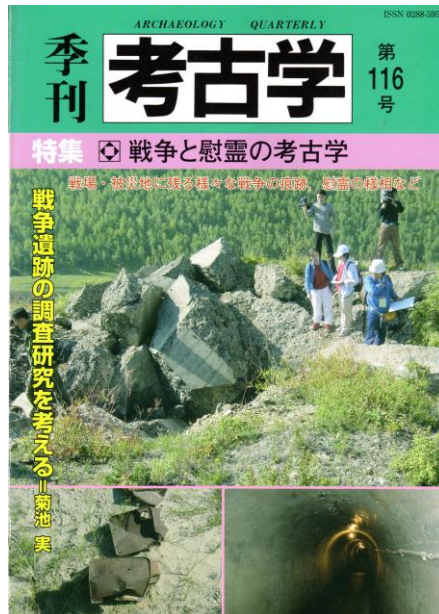
「戦争と慰霊の考古学」とはまた思い切った特集のタイトルである。「遺跡や遺物によって人類史を研究する学問。古くは古物学ともいった。」が考古学の定義だが(広辞苑)、もともとは文字以前の先史時代が主たる対象だった。しかし今や中世・近世はおろか昭和の戦争までもが研究の対象である。「新しい時代の考古学」とは研究の方法が遺跡・遺物の調査など考古学の手法をとるからであって、決して形容矛盾ではない。

### 菊池実さんの仕事

本フォーラムの共同研究者でもある菊池実さん(群馬県埋蔵文化財調査事業団)は1992年に「戦跡考古学研究会」を結成した。戦跡考古学は1980年代から沖縄の研究者によって提唱されていたが、戦争遺跡を考古学的手法により発掘、保存、活用する運動の先駆者になったのである。文化庁が原爆ドームの世界遺産登録申請のため、文化財保護法に基く史跡等の基準を改め、「戦跡」を指定対象に加えたのは1995年になってからだ。

菊池さんの専門テーマは縄文時代の墓制や集落の研究だが、これが文献史料に偏する歴史家の盲点を突いた。何よりも遺跡・遺物による実証、加えて防衛庁防衛研修所図書館等に日参しての史(資)料博搜ぶりは歴史学者顔負けで、まさに「鬼に金棒」である。この15年以上、戦争遺跡に関わる多くの著書、編著書を世に問うてきた。

その菊池さんが特集の巻頭論文「戦争遺跡の調査研究を考える」を書いて、戦跡をめぐる現状と課題、問題点を明らかにしている。そこには戦争の現実から教訓を引き出し、今後の平和に役立てたいとの思いが一貫しているから、ともすれば戦争遺跡を「負の遺産」として軽視、無視しようとする動きへの鋭い指摘、批判がある。戦争遺跡を調査研究する



意義は、何よりも「日本の侵略戦争や植民地支配に関わる歴史的事実を伝える」ことだが、同時に「戦災のあと復興し生きてきた歴史を考えるうえでも」重要だという。

なお執筆中に起こった3・11を受けた「追記」で、敗戦後に戦争責任や戦争犯罪の追及が疎かにされたように、原発事故を招いた産官学や政治家の責任追及が疎かにされてはならないと

書いているのも、菊池さんの問題意識を物語っているとと言えるだろう。

### 祀られる人を中心に…

詳述する紙幅がなくなってしまったが、「慰霊の考古学」という視点には驚かされた。「忠魂碑」「忠霊塔」の類が、ともすれば戦没者遺族に肉親の死を受け入れさせ、ひいては広く戦意高揚に役立てようとする装置だと思っていたからである。本誌では特に群馬における3本の論稿に教えられる点が多かった。しかし中国や東南アジアに建てられる日本人将兵の慰霊碑が現地の人たちにどんな感情を呼び起こすか、また最近の遺骨収集をめぐる問題(フィリピンで日本兵の遺骨として、明らかに女性や子どもの骨が送られてきた)など、ことはそう簡単ではないように思われる。

(文責:内藤真治)